

古本あれこれ

24期 徳田完二

このごろ古本をよく買う。数年前からネットオークションで見つけた本を手に入れることが多くなった。一方、年金生活になったせいもあり、本屋で新本を買うことはめっきり減った。古本では小説も買うが、最近は漫画がわりと多い。昔懐かしい作品もあれば、比較的最近のものもある。

古本のよい点はもちろん新本より安いことである。が、私の場合はそれよりもむしろ新本ではもう買えない（あるいは、普通の本屋には置いていない）本が手に入ることである。たとえば、私が小一だったとき（昭和三十六年度）に発行された小学館の『小学一年生』五月号。藤子不二雄の連載漫画が載っていた記憶があったので、ヤフオク（ヤフーオークション）で見つけた時はすぐ入札し、競り落とした。届いた本のページをめくると、（ああ、この絵、確かに見たことがあるな）と思い出せるものがいくつもあって懐かしかった。

ネットオークションで本を買う以外では古本市に毎年行く。それは京都市近辺の古本屋が集まって催すもので、夏は世界遺産である下鴨神社、秋は京大のすぐそばにある知恩寺（知恩院ではない）で行われる。

何年か前の夏の盛り、例によって下鴨神社の古本市に行った。参道の周囲には糺の森（ただすのもり）という原生林があって、その中に社殿まで続く土の道がある。それに沿って、三十軒近くもあろうか、たくさんの古本屋がびっしりテントを並べているのが夏の古本市である。

いちばん端の店から順々にまわっていたら、「モリミノル」という作者の漫画が目にとまった。モリミノルとは、日本を代表するSF作家、小松左京のことである。彼が京大生だった時、モリミノルというペンネームで漫画を書いていたことは、手塚治虫の自伝で知っていた。店の本棚に並んでいたのは箱入りの復刻版だったので、新品同様にきれいだった。何作かを収録したその本は分厚く、稀覯本だけに高値がついていた。それで買うのをためらい、別の店をひやかしに行った。が、まもなく引き返し、思い切ってモリミノル本を買った。

家に帰ってさっそく開いてみると、手塚治虫の初期作品を彷彿とさせる絵柄と内容だった。SF物のほかにロシアの民話『イワンのバカ』があった。あの小松左京が二十歳のころこういうものを書いていたのかと思うと親しみが湧いた。私も子どものころから漫画を書くのが好きだったからである。セリフが手書きなのも手作りの雰囲気があり、親近感を強めた。

私もこれまで専門領域に関わる本をささやかながら書いてきた。それらの本がネット上で古本として売り出されているのを見ると、ちょっとくすぐったい気持ちになる。値段はまちまちで、「定価より〇〇円お得」と書いてあったり、在庫切れの本だと定価よりだいぶ高い値がつ

いていたりする。その値で買う人がいるのかどうかは知らないけれども、いずれにしても、書き手としてはよい読み手のところに行ってほしいと思う。

連載ミニエッセイ 12

禁煙体験

大学に入学するとすぐたばこを吸い始めた。次の年、再受験のため浪人生活に入り、その間はたばこを吸わなかったが、また大学生になったとたん喫煙を再開した。その後、何度か禁煙を試みたことがある。いずれも十日と持たなかったと思う。

吸う本数は、はじめ一箱（二十本）くらいだったのがだんだん増え、最終的には一箱半近くまでになった。そして、いつの間にか禁煙しようとは思わなくなった。今では考えられないことだが、大学院の時はゼミのような授業中でもみな平気でたばこを吸っていた。そんな時代もあったのである。

しかし、世の中は少しずつ変わっていき、スモーカーに対する風当たりがだんだん厳しくなった。発ガン性があるから喫煙は望ましくないというのはずっと前から言われていたが、ある時期から、スモーカーでない人も副流煙を吸うとガンのリスクが高まるとの情報も広まったのが大きかったと思う。かくして分煙という考え方が生まれ、喫茶店やレストランでは喫煙席・禁煙席が設けられるようになった。建物の中でも街中でも喫煙可能なエリアがじわじわ狭まっていった。

そんな時勢の中、私は禁煙を思い立った。それは四十九歳のときで、なぜか元旦の誓いではなく、松の内が終わってからふと思いついた。そのとき頭に浮かんだ考えは「よし、五十になるまでにたばこをやめよう」だった。「五十歳」というのがとても切りのいい節目だと思ったのである。そして、今度は禁煙を実現できそうな気がした。

周囲に対して禁煙宣言などすると失敗した時に格好が悪いので、誰にも言わずにこっそり始めた。当時、同僚はヘビースモーカーだらけだったのだが、ある食事会の時、私がたばこを吸わないでいることに気づいた同僚が、

「あれ？ 徳田さん、もしかしてたばこやめたの？」

と聞いた。それに対して

「うん、まあ…」

とあいまいな返事をしたように思う。禁煙開始から十日ほど経ったころのことだ。

はじめはわりあい順調だった。ときどき吸いたくなる気持ちが湧いたが、どうにか凌げたからである。それで、こういう状態を一定期間過ぐせば淡々と禁煙が成就されるだろうと考えた。ところが、実際はそんなものではなかった。

二カ月くらい経ったころ、私はそれまでにない苦しさを感じ始めた。それは曰く言い難いもので、「なんとも説明できない胸苦しさ」とでも言うほかない代物だった。禁煙初期の苦痛は「吸いたい気持ちをがまんするつらさ」で、もしそれに耐えかねてたばこを吸ったとしたら、立ちどころに消えてくれるだろうと思えるものだった（もっとも、禁煙に挫折したふがいなさで自己嫌悪に苛まれるだろうが）。これに対し、禁煙開始二カ月後くらいに襲ってきた未経験の苦しさは、たばこを吸ったところで消えてはくれないだろうと想像できるものだった。にっちもさっちもいかず、身の置きどころがない苦しみ。私はそれに一カ月ほどもつきまとわれたような気がする。

それをどうにか耐え通せたのは奇跡だったかもしれない。あの苦しさは二度と味わいたくないと思った。そんなわけで、私は誰かが禁煙を考えていると聞くと、こんな冗談を言ったものだ。

「たばこやめるの？ 考え直した方がいいよ。禁煙はからだに悪いから」

そう言えば、禁煙に成功してだいぶたったころまで、同じような夢を何度も見た。それは、何気なくたばこを吸っていて、「しまった！ 禁煙していたんだ！！」と気づき、ひどくうろたえる夢である。目が覚めてから、「ああ、夢でよかった」と何度思ったことだろう。

このごろは、狭い喫煙スペースでたばこを吸っている人を見たまにかけると、なんだか哀れな気持ちになる。それと同時に、もはやそのスペースに身を置かなくてすむ自分につくづく安堵する。